

vol.2

選書者：寄藤文平

(アートディレクター、グラフィックデザイナー、イラストレーター)

●『性暴力と修復的司法—対話の先にあるもの』 著者：小松原織香

タイトルから身構えてしまう方もいるかもしれませんが、一步踏みこんで、ぜひ読んでもらいたい一冊です。僕にとってこの本は「コミュニケーションとは何か」を考える上で、まず最初に立つべき場所を教えていただいた一冊です。さまざまなテーマが結節した内容で、「こんな本」と端的にまとめることはできませんが、こと、ここに示されている「二人称の世界」についての考察は、「どうにもこうにも生きづらい」と感じる誰も彼もにとって、一読の意味を持つと思います。

●『俳優の仕事 第一部：俳優教育システム』 著者：コンスタンチン・スタニスラフスキー

かねてから、SNS やオンライン空間は「劇場」だと感じてきました。この本は1900年代前半ぐらいに書かれた演劇理論の本です。昔の本のように感じますが、その内容は、現代の「劇場」においてこそ大切な深い示唆に富んでいます。だれもが表現できる時代にあって、「私」はどのように「演じ」うるのか。また、その舞台を見ている「私たち」は、そこから何を汲み取るべきなのか。「演ずる」ことは「虚構」や「偽装」ではなく、生きることそのものだったのだと気づかされた一冊です。

●『ぼんぼん』 著者：今江祥智

著者の自伝的小説。大阪を舞台に、ある少年の戦前から戦中の生活を描いています。僕はこの本の間合いに惹かれます。この本の中で、戦争や空襲は「なんとなく日常生活に小さな変化があらわれて、気がつくとも B29 が飛んできて、あれよと目の前に火が迫って、ともかくも走り、つまるどころ生き残っていたようだ」という、少年独特の間合いで描かれています。気がつけばウクライナ戦争がはじまり、いつのまにか物価が上がり、簡単にできたことが少しずつできなくなる。そんな今だからこそ読んでほしいです。

●『現代社会の理論：情報化・消費化社会の現在と未来』 著者：見田宗介

「未来」というフィクションを扱うことに対して、自分なりの見解を持ちたいと考えて読んだ本。「消費社会」と聞けば、「そこに明るい未来はない」といった否定的な立場をとってみせ、しかし「消費社会」の一部として生きることを止めようとはしない。この本には、そのような自分のふるまいそのものに現れている本質的な「消費社会」の構造と、その揺るぎない理由が示されています。それを認めた上で、どのように変化しうるか。見田さんの見通しには、フィクションではない「未来」を感じます。

●『世界は「関係」でできている：美しくも過激な量子論』著者：カルロ・ロヴェッリ

『客観性』著者：ロレイン・ダストン, ピーター・ギャリソン

「光は波であり粒子である」と聞いて「なるほど、そっか！」と納得することは難しいでしょう。しかし、この本はその難しいところを明瞭な筋道で説明してくれます。まず、「光は波であり粒子でもある」と考えている人間もまた「波であり粒子でもある」。「量子世界」を「人間」が観察しているのではなく、「量子世界」が「量子世界」と関係している。その関係のありさまによって、光が波であったり粒子であったりする。そのような世界の把握の仕方に、僕は「なるほど、そっか！」と感じました。